

アメリカ史学に見える保守主義の大勢

——ジョン・ハイアムの論文より——

今 津 晃

【要約】 アメリカ史学が社会史ないし思想史の形式において、一種の革新的風潮に棹したある時期があつた。大雑把にいつてそれは、ニュー・デイルをはさんで大戦から大戦の期間であり、ターナー、ビアードおよびペリントンを三つの高い嶺とした。ところが第二次大戦後に、この風潮はまったく影をひそめた。一つには、いわゆる革新的歴史家の安易な両極的把握を是正しようとする、内的な要請からであらう。しかしより基本的には、アメリカ資本主義社会の構造それ自体、さらには共産圏世界との国際的対立といったような諸要因がからんでいるのではあるまいか。本稿は、中堅学者として第一線級にあるミシガン州大学教授ジョン・ハイアムの論文を通じて、アメリカ史学の保守的大勢図を描こうとするものである。

はじめに

ウィスコンシン大学キャンパス内のヒストリカル・ソサイティにある一研究室で、いまこの原稿を書いている十二月廿日、恒例の全米アメリカ歴史学会（第七十五回）は一週間後に迫っている。廿八

日から三日間がその会期で、今年の開催地はニュー・ヨーク市、注目
の会長はシカゴ大学近代史名譽教授のシュミット博士（Bernadotte
E. Schmitt）であり、『実にわずかな知恵をもつて』（With How
Little Wisdom）と題した同博士の会長演説は、なか日の廿九日、
晩餐会の席上で行なわれる。本年度の部会数は五十七、東西古今に

わたるすこぶる広汎・多岐な研究発表だが、筆者らのようにアメリカ史およびアメリカ史学思想史を学んでいる者にとつて、最も興味ある部会の一つは、同じく廿九日の『アメリカ史学はどこへ行きつゝもるか』(Where is American Historiography going?)と題した部会だろう。この席での議長は、「リヴィジョニスト」の最右翼にあるジョンズ・ホプキンス大学のウッドワード教授(C. Vann Woodward)、発表者はシカゴ大学のダニエル・ブースティン(Daniel J. Boorstin)と、目下ミシガン大学にいるジョン・ハイアム(John Higham)の両教授で、前者は『歴史学的経験の多様性』(Varieties of Historical Experience)と題し、後者は『一致感覚を越えて。道徳的批判者としての歴史家』(Beyond Consensus: The Historian as Moral Critic)を掲げる(なおコメントには、プリンストン大学のバーノン(Rowland Berthoff)、カンサス大学のメーリン(James C. Malin) 両教授が当る)。かつて一九五五年、コロンビア区ワシントンで開催された第七十回大会、その一部会でジェンセン、モリス、ブラウンといつたアメリカ革命史の東西の花形が妍を競つたのは、われわれの記憶にまだ新しいところだし(拙著『アメリカ革命史序説』、第三部第八章参照)、いわゆる「ジェンセン・ブラウン論争」は未解決のまま、今日なお独立革命史学徒の話題となつているのだが(ジェンセンの著作の第三版序文

参照。彼はウイスコンシン大学歴史学科の代表的学者。目下ヨーロッパで研究および講義中で、若手の客員教授ラヴジョイ(David S. Lovejoy)が独立革命史セミナーを代講しているが、これに出席中の筆者は、ジェンセン・ブラウン論争の論争性にいよいよ感を深くしている)、恐らく以上の論争に劣らない興奮が、ブースティンおよびハイアムの研究発表で喚起されることだろう。すくなくも筆者は、それを予期し期待している。というのは第一に、今回の部会での問題は、ジェンセン・ブラウンの場合のようなアメリカ史上の一つの出来事をめぐつてではなく、より包括的より基本的な、アメリカ史学のあり方そのものすばりに関連するからであり——筆者の周囲の史学科学生たちが問題とする結着点はいつもそこだ——、第二には、ブースティンが最近の保守主義の代表的理論家ならば、ハイアムは「インテレクチュアル・ヒストリと革新主義的精神」との一致を信条とする他方の明快な理論家だからであり(一九五一年四月のアメリカン・ヒストリカル・レビュー巻頭論文(ハイアムの論文)参照)、第三に——これこそハイアムの論文を訳出しようとした筆者の動機に直接かかわってくる——、両者の衝突は、約二年まえ『コメントリー誌』(一九五九年二月号)でハイアムが反撃の火ぶたを切つて以来、或る意味では宿命的だとさえいえるからである。いわば今回の部会は、両者にとつて第二次戦の意味をもつもの

と考えられる。

必ずしも逐語的ではないが、しかしかなり忠実に訳出したハイアムの論文は、『アメリカ的一致感覚』への崇拜。われわれの歴史の同質化』(The Cult of the "American Consensus" : —Homonizing Our History) という題名を⁹⁶。そこでは、アメリカ史学における保守主義の現状が、ブースティンを中心として紹介・批判されているが、積極的な対策論は控え目にしか出されなかつた。ところが一転して今回の部会では、控え目は勃然と積極性に変わり、歴史家の道徳的責任を問いつつ、そのような実践をおしてアメリカ史学思想に見える保守的コンセンサスの克服が呼びかけられるものようである。そういつた態度の変化の可能性は先の論文からもすでにうかがわれたが、彼はこれを歴史学の問題として具体的にどうアプローチするだろうか。学会出席を予定している筆者にとつて、興味津津たる話題である。アメリカ史学の現状を知るのに有益だという意味でも（読者は、著名ないく人かの保守的歴史家を発見されるだろう）、またハイアムのいう、「不安を交えた自己満足(の霧)が将来も「アメリカの過去の上を蔽う」かどうかを占う一つの方法としても、ここにあって訳出を思いつた次第である。

ジョン・ハイアムはコロンビア大学のリチャード・ホフスタッター (Richard Hofstadter) と並んで、マール・カーティ (Morte

Curtis ハーヴァードにおけるターナー最後の学生の一人、現在ウィスコンシン大学でフレデリック・ジャクソン・ターナー講座を担当している。全国アメリカ歴史学会とミシシッピ・ヴァリー歴史学会との会長を勤めたこともあり、ビュリッツァー賞授賞者) 門下の逸材である。一九二〇年ニューヨーク州のジャマイカに生れ、四年ウィスコンシン大学で修士、四九年同じくここで学位を得た。

彼はウィリアム・ダニング賞に輝やく移民研究で中堅学者としての地位を確立したが、師カーティからの信頼は絶大のようだ。カーティのセミナーにも出席中の筆者は、ハイアムの名前が出ない授業には一度もお目にかからなかつた、とまでいいたいくらいだ。はやくから社会や教育の改革を志し、故ビアード博士とは無二ともいえるほどの親友であり、そしていまや六十の坂を四つも越えたカーティ教授が、有能な弟子に託した期待の大きさを示すものであろうか、ハイアムの論文はたとえ未発表のものでも、セミナーの材料として使用される状態である。ともかくハイアムは、インテレクチュアル・ヒストリ開拓の一人と自他ともに許すカーティ教授のもとに、思想家としての経歴を積んだ。因みに、はじめカリフォルニア大学(一九四八―五四年)、次いでニュージャージー州のラトガーズ大学(五四―五八年)、コロンビア大学(五八―六〇年)、目下ミシガン大学が彼の奉職先である。

次に駄足ながら、ハイアムの相手のブースティンを、シカゴの同家から得た資料によつて簡単に紹介しておこう。彼はすこぶる問題提起的な四つの著作と、計画中のものを含めて二十数巻にのぼるアメリカ史の編集とで、ここ数年間に、最もユニークな学者の一人という刻印を捺された。一九五七年四月から六カ月間、京都大学文学部で講義した他、同志社・京大の共催による夏期セミナーにもタッチした関係から、われわれとの馴染みもすでに深い。

彼は一九一四年にジョージア州のアトランタで生れ、二年後オクラホマ州のタルサ (Tulsa) に移動 (父はジョージア大学出身の弁護士)、小学校の頃から他に抜きんでて、満十六歳にもならぬうちにハーヴァード大学へ入学した。一九三四年、イギリスの歴史と文学関係を最優等で卒業した後、セシル・ローズ基金をもらつてオックスフォード大学のベリオール・カレッジに学び、B・AとB・C・L (バチニラー・オヴ・シヴィル・ロー) とともに最優等で卒業した (ダブル・ファースト) というまれに見る成績)。また彼はロンドンのインナ・テンブルにも席をおき、三七年にはイギリス上級裁判所弁護士の資格を獲得、同最高裁判所で弁護に立ちうるごく少数のアメリカー人の一人に列した。この年三七年に彼は帰国し、イェール大学で法制史の学位をとつたが、次いで母校ハーヴァードへかえり、三八一四二年にはハーヴァード・カレッジで英米の文学と歴史

とを、ハーヴァード・ロー・スクールで法制史を教えた。さらに四二一四四年、スウォースモア・カレッジでヨーロッパ史とアメリカ史とを講義した後、四四年からシカゴ大学に移り現在に至つている (この間、彼はイタリア、シシリア、プエルトリコ、ユカタン半島地方、ガテマラ、メキシコ、日本、南朝鮮、セイロン、インド、イラン、トルコを訪問、各地で講義している)。一九五三年、彼の

第三番目の著作『アメリカ政治の守護神』(The Genius of American Politics) が公刊されたとき、それは歴史家や政治学者の間に異常な反響を呼んだ。ちやうど四十年まえ、ピアードが『合衆国憲法の経済的一解釈』を書いたときのようなのである。同じように波紋を投じながら、両者の立場がまったく正反対だという事実は、この四十年間におけるアメリカ社会および精神の変異を象徴するといつても過言ではなからうが、例えばロンドン・エコノミスト紙などはブースティンを「ウォーバッシュ川のバーク」(the Burke of the Wash) とまで激賞したし、ターナーやピアードに比肩する歴史家と絶讃する人もあつたくらいである。因みに第四番目の近著もいくつかの賞を得たが、なかでも名譽あるバンクプロフト賞を受けたことは注目してよい。「ネオ・コンサーヴァティヴ」の代表者と目されるブースティンに、ハイアムがどう切りこもうとするか。われわれの大きな興味である。

ところでハイアム自身も予想しているように、アメリカ史学における保守主義の大勢は、今後も基本的な変化を見ることはまずまずなからう。ただ一九六〇年代のアメリカ史学は、大雑把にいつて保守的な思考規格の中にあつても、五〇年代とはやや違つた進歩的ニュアンスをもち直してくるのではあるまいか。もちろんこれは、筆者一人の感じにすぎない。しかし、ウィスコンシン大学ヒストリカル・ソサイティの学生たちの論争に聴き耳を立てているとき、この感じは案外力強く筆者の胸に湧いてくるのである。では、ハイアムというアメリカ史学の保守主義とは？

アメリカ的一致感覚への崇拜

いまからふり返つてみると、一九四〇年代にアメリカの過去の究明は基本的な方向変化をとげた、ということが明らかになる。当座のうちは、周囲の世界が喧ましかつたにかかわらず、アメリカ歴史家たちの心の中には、それほど異変が起りかけているようには見えなかつた。これまでどおりのモノグラフが、相変わらず続いていた。殊に南北戦争の壮観さについては、われわれがきりのない魅惑を感じているので、著作もこの種のものが多かつたが、成果は従来とあまり変らないままであつた。なるほど、大戦から大戦への期間にアメリカ史学界を支配していた巨人たち、フレデリック・ジャクソン

・ターナー、チャールズ・A・ビアード、ヴァーノン・L・バリンソンへの批判の書が頭をもたげてはいた。だが、この三人がアメリカの過去のスクリーンにはつきりときめた映像は、解体を始めたばかりであつた。一九五〇年になつて、ヘンリー・スティール・コマジャーの『アメリカ精神』がアメリカのインテレクチュアル・ヒストリをバリンソンの精神にまで遡らせたときも、その反響は多少古くさいという感じにとどまつただけであつた。

ところが過去数年間に、四〇年代の批判的態度はずつかり実を結んで、アメリカ史の主要テーマが全体的規模から再検討されることとなつた。昨日までの偉大なトリオは、影がうすくなつた。彼らのアメリカ観、つまり漠然と西部というものと結びつきつ、アメリカにおいてこそデモクラシーは城塞堅固な経済的特権に反抗したのだ、という考え方は、もはや合衆国の発展の姿を十分に説明できるほど基本的とは考えられなくなつた。概してターナー、ビアードおよびバリンソンの独特な解釈は、真に活潑な論争を喚起できるほど説得的とは思われなくなつている。それらは光沢をなくし乾燥して、多くの教科書の中にぐずぐず余命を長らえている状態であり、時たま「アメリカ革命の娘たち」という婦人団体や「デリー・ニューズ」や（ともに古風だという意味―訳者注）、もう死滅した問題の脅威を掘り出そうという骨董趣味の連中をたきつける程度にとどま

つている。そしてこの間に、われわれの現在の歴史意識は、ターナー、ピアード、パリントンの関心からはるかに遠ざかり、いまや解派の歴史家たちは、前三者を批判したり弁護したりする必要よりも、それらにとつて代る必要を感じている現状なのである。

しかし、巨人は天下にかくれもなく大きすぎたため、まだ彼らの後ガマに座るような者は誰もいない。アメリカ人とは何かということについて、以前とは違つた意味をわれわれに与えつつある新刊書は数多いが、それらは、第一級の歴史叙述が当然もつべきスケールをも緻密さをも、また構成上の強さをももっていない。それでもなお、活潑な仕事が行なわれている。断片的な研究を、現在の感覚に合つたような、或る新しい型にはめこもうとする重要な書物がいくつか出ている。それらがねらいとする支配的なイメジは、一九四〇年代に流行したような荒れ狂つた光景とはほとんど似ていないのである。

ターナー、ピアードおよびパリントンによつて吹きこまれ、休まない改革の雰囲気で育てられた前時代の歴史家たちは、闘争の雄叫びの中でアメリカを描いたものだ。彼らの解釈は、或る時はクラスとクラスとを取組ませたし、或る時はセクション対セクションであつたし、さらには、セクションおよびクラスの双方を相争うイデオロギーの背後に整列させたのであつた。例えばそれは、東部から西

部へと惹きつけられてゆく南部を介在させて、東部対西部であり、要めの位置にある都市労働者を介在させて、農民対実業家であり、都市対農村であり、財産権対人間としての権利であり、ハミルトン主義対ジェファソン主義であつた。こういつた分裂線は植民地時代から今日まで、断ち切られることなく作図された。これらは、二十世紀初期の歴史家たちが自己の周囲全体に見てとつた社会闘争に、興行き感覚を与えたのであつた。

アメリカ史に見られる諸時期間の相違も、集団間の相違と同じくらいクローズ・アップされた。闘争史観に同調した学者たちの間では、アメリカ史には鋸の歯のようなぎざぎざがあつて、連続性がなないように思われた。ピアードといつたような歴史家たちは、歴史の中の発作的な要素に眼を向けた。そして彼らは、一つの側または他の側が支配権をにぎるかに見えた旋廻点を、ヴィヴィッドに脚色したのであつた。彼らから見れば、アメリカには、恐ろしい抵抗をのり越えていつものとおり勝利へと進み、そのくせ遂行されない約束が常に大きい、いくつかの革命があつた。彼らは、一七七六年の革命を単に独立のための戦争としてだけでなく、植民地内部での権力の急激な再分配だと考えた。彼らは、南北戦争を「第二次アメリカ革命」と呼んだ。そしてこの二つの時期の間で、ジェファソンが政権をとつた「一八〇〇年の革命」や、アンドル・ジャクソンの背

後での一般人民の闘争的な立上りに歓呼の声を送った。それだけではない。もちろん産業革命もあつたし、その後には勇ましい人民党の反抗運動も続いたし、また植民地時代全体にわたる同じような社会闘争も、彼らの注意を惹いたのであつた。

ところで、これら変化の鑑識家たちは、一寸ばかり本筋を逸れてアメリカ史の一貫性というニュアンスから、ニュー・デイルの新しさをしばしば軽視した。その眼が現在に近づけば近づくほど、彼らは反抗運動の中にもつとはつきりと伝統的な要素を窺た。彼らは次のことを知つた。自分たちの時代の問題は長い遺産につながれ、変化も予期したほど大きくなく、過去のいろんな推移のほうがつと急激だつたように思われる、と。しかし全般的にいつて、アメリカ史上の重大事件は進歩の里程碑として目立つたのであり、そのさい人々は着古した信念を脱ぎ、自分たちの諸制度を変化した環境に應じてつくり直したのであつた。（と、こう彼らは考えたのである）。

* * * *

これとは対照的に、アメリカ史関係の新刊書はいちじるしく保守的である。以前のどの時代よりも、歴史家たちはいま、静かで平和な過去を沢山発見している。気になるくらいにまで支配的な歴史解釈は、アレクシス・ド・トックヴィルの精神をとり戻した解釈であり、彼の著『アメリカの民主政治』は二十世紀はじめ頃のはなはだ

しい忘却の中から、近頃は逆に浮び上りつつある。トックヴィルが一世紀以上もまえにいつたように、今日の歴史家たちは、たとえやり方が冒險なようでも実質は保守的な、そして——とりわけ——いちじるしく同質的な、一個の幸福な国土なるものを描き出している。

言葉を変えれば、今日の学問は、アメリカ社会の震動がスムーズだつたといいつくろうための、大きな地均らしをしているわけなのだ。アメリカ革命はその革命的性格を失い、いわゆるお人柄の歴史家連がこれまでいつもいつてきたように、イギリス的自由への侵害に対する真面目なイギリス人たちの、いやいやながらの抵抗だ、という考えに逆戻りした（傍点訳者）。われわれはまた、こういうことを知つた。ジャクソンニアンはすぎ去つた時代の安定した素材さを回復しようと、ノスタルジアの気持で過去を慕つた人々であり、ポピュリストも同じような牧歌的神話に迷わされた地方の実業家たちであつた、ということ。逆説のない方をすれば、われわれは、最近の過去の中かなり急激な変化を認識するまでに、こうしてリチャード・ホフスタッターとともに、社会革命の諸要素をニュー・デイルの中に探るまでに、保守的となつたのである。非常に反響を呼んだホフスタッターの書物『改革の時代。ブライアンからルースヴェルトへ』(The Age of Reform: From Bryan to F.D.R.,

1965)は、それ以前の諸解釈とほとんど逆である。それは、一八九〇年代のポピュリズムおよび二十世紀はじめのプログレシヴィズムを力強い運動としてでなく、過去をとり戻そうとする古風な努力として描いている。しかも他方でそれは、ニュー・ディールを過去との急激な切断として示しているのである。

ニュー・ディール以前の重大な事件の中では、南北戦争だけがこういつた嬉しがらせにいくらかもちこたえられたにすぎない。だがこの場合でも、或る注目すべき退化現象(保守的解釈への趨勢―記者注)が、専門家たちの数多い重要な研究に現われている。極小化できないような騷擾は研究対象から放つてしまわねばならぬ、とても結論してしまうような錯覚に陥りやすいのである。

ところで、これら歴史上の諸旋廻点がかつて重要な意義をひき下げることによつて、新しい解釈はわれわれにアメリカの歴史の連続性、その基本的諸制度の安定性、その社会構造の強靱性を再発見させることができた。さらにまた、パリントンやピアードの強調した頑固な二元論を解体させ、その代りに一元的な型をもつてくることによつても、これと同じような結果が出てきている。国家発展の線に沿いつつなお、その中で相互に対抗するものとして描かれた二つの伝統、二つのセクション、二つのクラスの代りに、われわれは、アメリカが最も広い意味で一つの統一された文化をもつている

ということを知らされるのである。クラスは神話となり、セクションはその紐帯を失い、イデオロギーは意見の気候 (climate of opinion) へと蒸発してしまふ。「アメリカ的経験」という言葉が、一つのまじないになつてゐる現状である。

この呪文的な言葉に実質の意味を与えるため、歴史家たちは社会学者と合同して、新しく国民的ナショナルな性格characterという觀念の究明に奔走している。ところが国民的ナショナルな性格characterの定義は、当然のことながら、一文化全体がどんなに広くて根強い特徴をもつているか、ということに關連してくるからして、進歩的な学者たちはそういった定義を信用しなかつた。しかしながら今日、国民的ナショナルな性格characterの研究は、以前われわれに分裂的だという感じをさえた諸力を統一化する効き目を現わし出している。こうしてデーヴィッド・ポッターの『豊沢の国民。

経済的豊潤とアメリカ的性格』(David Potter, *People of Plenty: Economic Abundance and the American Character*, 1964.)は、^②アメリカの相違点ではなくて、類似点についての一経済的解釈を進めている。パリントンやピアードの世代が経済的基盤の基本的亀裂を説明したのに反して、ポッターは、われわれの富がわれわれに共通の生活様式をつくりつつあることを示すのである。

いうまでもなく、新しい歴史解釈者たちも、一国の歴史の諸時期を扱ううえにおいて相当程度まで、實際起つた闘争に制約されなけ

ればならない。彼らはまた、多くのアメリカ人がそういつた時期に、自国を「もてるもの」と「もたざるもの」との間の亀裂として考えた事実を承認しなければならない。しかし彼らは自分の所信を強調しすぎるあまり、かえつて実体を極小化してしまうのだ。闘争の心理学的アプローチを通じて、歴史家は社会の分裂の代りに魂の分裂をおき代えることができる。確かに今日の学者たちは、アメリカ生活の中のいろいろな圧力を主観化する傾向にある。分裂——これを、前世代は明確なグループ間の基本的対立と考えたのだが——は變じて、全体としての社会にゆきわたる一般化された心理学的緊張というものになつてしまふ。一九三〇年代にジョン・ドス・バソスがやつたにがにがしい爆笑——「間違ひなくわれわれは二つの國民だ——は、もはや心的状態の過去の記録となつている。大実業家拾頭の時期を扱つた最近の研究成果によれば、彼ら大実業家に対する民衆の反抗は、万人がその中に投げこまれて急激な工業的變化に責任をもつグループへの出しやばりとして説明されているのである④。

* * *

それゆゑ、今日の歴史家たちの批判では、人口のどれか一部分をとり出して、これを非難するというやり方は慎重に避けられるのである。彼らは、相争うグループ間の相違を誇張した神話や紋切型を批判するか、或いは画一性（相争う二つのグループが明確に存在す

る、といったような一訳者注）を槍玉にあげて、もつと多くの多様性を要望するのである。新解釈の書物では最もきわ立つていると思われる『アメリカでの自由の伝統。独立革命後のアメリカ政治思想の一解釈』（The Liberal Tradition in America: An Interpretation of American Political Thought since the Revolution, 1955.）で、ルイス・ハーツ（Louis Hartz）が苦慮した点は何かといへば、アメリカには自由主義の伝統しかない、ということであつた。彼の論点はこの國で並ぶもののない支配力をもつているから、政治論争は大部分が一人相撲になつてしまふ、と。「アメリカは、これまで自己自身の歴史が否認してきた哲學的ひらめきだとか、相互比較的な見識だとかを与えてくる、他の諸國家との接触を求めなければならない。」

ハーツ自身が共感をもつたのは、実は異議であり相違であつた。彼は明らかに、自分でとり上げた自由主義的一致感覺なるものが、思想的には眠気を催させるような意味しかもたないことを知つて、寝つけなかつた。アメリカ史について一本筋のとつたアプローチを縦横に駆使するには、もつと慌に入つた、もつと國際主義的なオリエンテーションがない、そしてもつと思想の価値を尊重しない観点が必要だ。ハーツが學術雜誌に、彼の書物の前の部分をはじめて発表し出した頃は、ダニエル・ブースティンは保守主義の方向

で、これと同じような、しかしもつと思いきつたアメリカ史改訂を行なつていた。ブースティンは徹頭徹尾、非哲學的諧調をもつた論法で書いたのだが、そういつた諧調こそ、彼とハーツとがそれぞれ立場から強調していたところのものであつた。

一九五三年に出版された小粒で辛い講義集『アメリカ政治の守護神』は、ブースティンの主題のエッセンスを述べたものである。外見上、本書は比較的限制られた問題を扱つてゐる。すなわち、なぜアメリカでは系統的で基本的な政治理論がほとんどつくりだれなかつたか、ということである。こういう疑問をもつたのは、もちろん彼が最初ではない。大半のアメリカの思想史家たちが、かなり強硬にこの科を否定しようと努めている。しかし、ブースティンはそういうつた弁解をしなかつた。彼は、アメリカの欠陥だと想像されるこのよな特色を、アメリカ人が国民として成功した勝利のしるしだと示した。ヨーロッパを酸っぱいものでも見るように横目で見ながら、彼は、アメリカ人が根柢的な理論を必要としなかつた次第を論ずる。別に深刻な敵対感情もないので、彼らは形而上学の砦がなくてもやつてゆけた。自分たちの過去を一度も否定しないで、彼らは政治哲學者としてよりもむしろ法律家として、自分たちの問題を論ずることができた。アメリカでの価値は、仕合わせな経験からきたものだ。つまり、ここでは「^{オポ}當為」が「^イ存在」からひき出されたの

だ。なるほど二十世紀に入つて、アメリカ人はもはや、自分自身をこれまでどおりのものと考えることができなくなつた。だからといつて、彼らにイデオロギーを獲得させようとしたり、闘士にならせようとしたりしてはならない。アメリカの政治思想は、アメリカの歴史的諸制度の中に埋められてある叡知に相談しさえすれば、それで事足りるのだ、と。著者はヨーロッパの理論を机上の論理としてあなどつてゐるにわかかわらず、どちらかといえば、結局はエドモンド・バークが有益だということになるのである。

ブースティンが、アメリカ生活の中に思想がないのをこのように祝福したということは、決して世間知らずの無教養からきたのではない。彼は、ヨーロッパ文化を身につけ、それに気やすく参加できる、アメリカ生れのごく数少ないアメリカ史研究者の一人である、ローズ・スカラー (Rhodes Scholar セシル・ローズ基金による訳者注)としてオックスフォードに学び、人文科学の学生でもあつたし生物学の学生でもあつた彼、インナー・テンブル出身の弁護士、イギリス思想史研究の著者でもある彼は、自分の冷笑しているものがどういふものであるかを知つてゐる。しかし、彼が『アメリカ政治の守護神』で展開させた見解は、単に一知識人の自己嫌惡——これまで自分が抱いてきたものとは逆の方向へ或る程度駆り立てられた一個の人間の片意地(マルキシズムからの転向—訳者注)

——として、葬り去ることのできないものがある。本書はこれより以上であった。それは、アメリカ史学の新傾向をてきばきと要約したものであつたし、同時にまたその新傾向の先駆ともなつてゐる。すなわち同質性、連続性および国民的性格への訴えである。なかなかそれは、アメリカ思想史のいちじるしく進歩的なアプローチをば、相容れないイデオロギーの弁証法として一掃し去つたのである。

ところでルイス・ハーツもすでに同じようなことを、のち彼の『アメリカでの自由の伝統』中に再録された諸論文で発表していた。しかしハーツのアプローチの特色は、アメリカ社会の同質性と連続性ともたらした思想的欠陥を突いた点にある。われわれの、想像のうでの軌道トラジクトリヤ一つの文化について、そういった懸念をもたないからして、ブースティンはハーツを一步越えたわけだ。ハーツは少なくとも、アメリカに一つの思想体系を認める。しかし、ブースティンはまったく何も認めないのである。

それぞれ異なつた、しかし時には重なり合うような方法で、これら二つの書物はアメリカ史に関する反進歩的解決の一般的輪廓を描いたのであつた。他の歴史家たちが、アメリカ史という物語の特定のエピソードを書き直していた間に、ブースティンとハーツは筋そのものを改訂した。ところがブースティンは、ここで立ちどまるこ

とをしなかつた。次には三部作という計画で、野心的にも『アメリカ人』と題するその第一巻（The Americans: The Colonial Experience, 1958）を公けにした。それは、前著『守護神』で述べられた主題を丹念に布衍したものである。本書はひととおり——しかし学問的に——、植民地時代全般を扱う。政治上の問題に限られることなく——この問題に触れた部分は比較的少ない——、宗教、科学、職業、演説形式、出版および戦術といった諸部門にわたる。これらの題目それぞれにおいて、ブースティンは彼の中心テーマ、もなわちアメリカがヨーロッパの青写真真を捨て、ヨーロッパ生活に見られた社会的・思想的特色を消し、差異のない人々アンイフレンシブルな人々による同質的社会へと動いてゆくことによつて栄えた次第を述べる。全篇をつらぬいて示されている点は、ナイーヴな実際性インテリジェントなのゆえに、アメリカ人はごく初期の時代から、分裂的な諸原理にわずらわされない安定した生活方法で一つになることができた、という主張である。

* * *

筆者から見れば『アメリカ人』のこの第一巻は長もちのする記念碑であるよりは、きらめく断片の収集であり、大きな業績であるよりは、魅力的な雑録集であるように思われる。明らかに、アメリカ史上のこの時代を扱つた書物の中で最も問題提起的な著作ではあるが、本書は気まぐれに——故意にといつてもよい——、一つの論題

を例証するため、いろいろなトピックを取合わせた性質のものであり、しかもその論題はあまりに単純、あまりに逃げ腰であつて、一国民の複雑な経験を包含することができない性質のものである。アメリカ史の連続性は想像上のものだからして、実際ブーステインの書物それ自体には一貫性はない。アメリカ文化の非系統的性格に酔いしれているものだからして、この本には計画性だとか体系だとかはほとんどない。それは齒切れのよい、オリジナルな即興演奏の連続ではあつても、決してシンフォニーとはならない（著者の視点がそういうものだからして、暗喩など使うのは不適当だ。シンフォニーはヨーロッパ的であり、彼はジャズを好むのである）。

思想上の限界を社会的な価値に還元するブーステインの巧妙さは、いちぶたりともたるむところがない。ビュリタンの物語から始まつて、彼は手つとりばやく、ビュリタンの哲学的深さを誇張した近頃の主張をやつつける。自己の思想をヨーロッパで創つたので、ビュリタンはアメリカでは、実際に社会の建設へとまい進することができた。荒野を自己の戸口にもつことによつて、彼らは非組合教会派を排除することができた。だから彼らは、綿密な寛容理論などを考え出す必要がなかつた。聖書とイギリスの慣習法とを自己の指針にして、ニュートピア的抽象の中で自己を失うことなく、先例に従つて行動することができた、とこういふのである。他の著作者た

ちが、ビュリタンをその敬虔さのゆえに好み、その狂信さのゆえに嫌つたのに対して、ブーステインは彼らの真面目な實際性を愛好するのである。

この、概して点数の甘い解釈の中で、手荒く扱われているグループはクウェーカー教徒である。彼らはアメリカ的生活様式への抵抗を代表する。つまり彼らは、宗教的原理を社会上の便宜に従わせようとしなかつた（とブーステインはいう）。例によつて、人間の思想よりも人間の態度というものに視点をおくことによつて、ブーステインは、クウェーカーが形式上の信条ではドグマをもたないにかかわらず、精神上の癖としては独善家であつたとする。伝道者としての彼らは、改宗を求めるのではなくて殉教を要望した。ペンシルヴェニアの支配者としての彼らは、自分の純潔を守るために、恩情ある立法を或る程度ないがしろにしたり、時には公けの責任を放棄したりさえした。こういう世間の常識からはずれた、また非アメリカ人的な性癖によつて、クウェーカーは自己の隣人に偏狭となり、ついに「差別のない」アメリカ人となることに失敗した。もつと悪いことには、彼らは精神的なコスモポリタンであり続けたため、「よい」意味でのヨーロッパからの孤立を達成することができなかつた、と。奴隸制反対運動におけるクウェーカーの指導的役割については何も語られていないし、彼らの宗教的寛容についてもほとんど触れ

られていない。理由は疑いもなく、これらの活動にはあまりに深い原理が浸みこんでいたからである（原理的だという事実をもつてくるのは、自分で自分の論理を破ることになるから―訳者注）。これに反しブースティンは、ヴァージニアでの宗教的寛容に拍手を送る。なぜなら、同地で宗教的寛容がもり上つてきたのは、実際のな妥協精神によるものであつて、何らかの理論から出たというものではなかつたからである。また彼はいう。マサチューセッツでの不寛容は、社会の統一を維持するために「有効」だつたからだ、と。しかし彼は、一原理としての宗教的寛容ないし不寛容のどちらにも一向触れていないのである。

本書はまた、それが高く評価している機会主義的で地方主義的な性質がどんな危険をもつているかを終始無視した、あまりにも頭でつくつた書物である。特に最後の、軍事組織を扱つた部分には、近視眼的なアマチュア趣味が目立つ。本書はまた、あれもこれもと広い分野にわたりすぎるため、その要旨の正しさに全幅の信頼をおきえなくさへなつてしまう。本書で扱われたトピックスの若干、例えば植民地での医学や弁護士開業などは、これまでわずかの専門家の注意を惹いたにすぎなかつた。専門家たちは疑いもなく多くの点で、ブースティンの説明のアラ探しをするだろうが、本書のもつ反知性的偏見に対してみずから憤りを抑制できるような読者なら、イギリス

スの型とははつきり違つた初期アメリカ生活の諸相についての、ブースティンのすぐれた洞察力を見いだすであろう。全体としてみて、アメリカ文化の中にある大きな特色の把握を、手近かで機能的な詳細事項とこれほど有効に結びつけた書物に、筆者はまだ接したことがないのである。

* * * * *

しかし、われわれが本書を繙いてゆけばゆくほど、アメリカ人の取めた成果を測定するブースティンの基準が分らなくなる。「実利的氣質」^{テイラント}がアメリカ文化を特色づけ、それがヨーロッパの机上の論理的文化と異らしめたゆえんだという考え方は、アメリカ国民にとつて最も当りまえの紋切型である。一八九三年フレデリック・ジャクソン・ターナーは、「すばやく臨機の処置を見つける、あの実際の工夫に富んだ性向、芸術性には欠けるが大きな目的を達成するには力強い、物質的な事柄の巧妙な把握」を抒情的に語つた。ブースティンがはつきりとその見解を訂正しようとしている進歩的歴史家の大半が、アメリカについてこれと同じようなイメージを抱いたものなのだ。彼の見とおしは実のところ、経験を強硬に尊重し続けた時代おくれの自由主義の実利主義者の見とおしと、そんなに違つているのだろうか（彼の見とおしはそんなに新しくはない―訳者注）。

（しかし、ここに問題がある―訳者注）なるほど、見かけはしば

しば非常に似ているように見える（同じく経験を云々しても、ブー
スティンの本質には似ても似つかぬものがある——訳者注）。パリン
トンやピアードのように、ブースティンは純文学を貴族主義的社會
や抑圧的な階級組織や、よどんだ特權制度に結びつける。ジョン・
デューイの哲学のように、ブースティンの歴史は、過去の形式的な
學問に拘束されない、経験を主とした思想家・実践家——例えば、
幸運にもヨーロッパ医学の物知りの無知で教えこまれなかつた初期
アメリカの医者——を称揚している。すぐれた実利主義者でもあ
るかのようには、ブースティンは、アメリカを革新だとか実験だとか、
新奇な経験への流動的な対応性だとか同一視する。彼の民主主義
的レトリックは、時として実利主義者自身のそれを越えてしまう。
アメリカ人を「差別のない人間」だとする彼のイメージは、ホイット
マンが讃えた「天与の通常性」(divine average) 出典は『草の葉』
——訳者注)へと後戻りするのである。

しかし本書の内容には、いつもこういつた修辭学的誇張だけが目
立つているというわけではない。その他、彼が実際に書いていると
ころを見れば、そこには大して実証は見当たらず、環境が植民地人
に何かをつくらせたという以外には、新機軸を出した様子もなく、
また彼がデモクラシーのポジティブな意味に関心をもっているとい
う事実もほとんど認められない。本書の白眉は、イギリスの言語が

アメリカで、もとの型の影響を受けつつなおどんなにいちじるしく
標準化したか、を扱つた部分である。この言語上の一様さを解して
「平等を求めめる地方語」としたのは、なるほど本書の論旨に沿うも
のではあつた。しかし、ほとんど新解釈といつたような点もなけれ
ば実証もない。平等というテーマについても、或る部分では愛着を
もつて、ヴァージニアのアリストクラシーを述べてさえている——著者
によれば、ビジネスライクにまた鵜呑みに、イギリスのアリストク
ラティックな型を維持しようとするのが、その特別の資質だとい
うのだ。さらにもつと別の例をあげるなら、「保守的出版業」と題し
た箇所を見よ。それは、植民地の出版業者が良書を出版する必要が
なかつたからして、公共一般に奉仕することができたという書き出
しであり、出版業者は、自分たちに補助金をくれかつ自分たちを統
制した支配者層に事実上奉仕した、ということまで筆を措いている。
明らかに、アメリカの諸制度をこのように口当りよく承認すると

いう式のプラグマティズムは、われわれが知り慣れている鬭争的信
念にただ表面上似ているにすぎない。真のプラグマティストたちに
とつては——ジエームズやデューイやその一党全体にとつては——
知識人こそ歴史上創造的な役割を果した人々なのであつた。思想こ
そ、實際の目的を達成するための貴重な道具であつた。したがつて
「實際的」であるということは、不斷にかつ慎重に、現存の諸制度

を変化しつつある諸問題に適応させるという意味であつた。ところがブースティンにおいては、思想は行動をみちびかない。行動が思想を規定するか、或いは思想を不必要なものにする。彼にとつて、実際のなものとはただ伝統的なものであり、それもアメリカ人にとつただけのことである。実験とはわれわれの神聖な先入観であり、わがネイティブ・アメリカンの正教である。それこそ、環境に順応するわれわれの仕方であり、そしてこの仕方は、ブースティンにしてみれば、ヨーロッパの保守主義と違つて、何ら余計な原理を秘蔵しないゆえにこそ、いちだんと快適なものなのである。しかしかういう考え方は、実利的な諸価値はそれがかつてもつていたはずかの一貫性をさえ失つてしまい、より大きい普遍的価値との一切の関連をなくしてしまう。方向感覚を少しも与えないからして、さういう意味の実利的価値は、わが国民的博物館の中の古くさい陳列品と化してしまう。活動力は単なる所有物と化し、われわれの実利的な慣性は、はつきりアメリカ的だというレッテルを貼りうる環境にただ黙従するということのシンボルとなつてしまふのだ。

保守的な歴史学を求めするために、実利的な態度をここまで^{ひょうりせつ}飄忽して解釈したという理由は、どこからきたのだらうか。この『アメリカ人』の著者は、必ずしも経験的な事柄にそれほど愛着をもつたり、また諸理論をそれほど軽蔑したりして、本書を書いたのではない。

一九四八年に彼は、『トーマス・ジェファソンの失われた世界』(The Lost World of Thomas Jefferson)——ジェファソンの思想の構造と仮定とに関する周到な研究——を著わした。その本で事実彼は、抽象的諸原理についてきわめて真剣に考えた。つまり、アメリカ人の実利的な気質がもたらす哲学的結果を探り、そしてそれらの結果を危険なものとしたのであつた。要点は、人間性の反省面をジェファソンが過少評価した点におかれた。ジェファソンの真意は、「神とわれ自身とが平和を保つ必要よりも、世俗的な事柄を達成しようとする願望」にあつたというのである。本書は、形而上学についてのジェファソンの嫌悪が、彼を思想的混乱に陥れたということ、彼の物質本位的な諸前提が、結局その後のアメリカ思想の道德的魯鈍さをもたらしたということ、を主張した。ところがいまや、極端な反転作用から、かつてジェファソンにその責めを帰していた悪弊はアメリカの長所となつた。信じられないようなやり口で、ブースティンはみずからその思想的コンパスの各針でもつて、アメリカ史の新解釈という地図を手がけたのである。

かういつたブースティンの廻れ右を理解するには、この二つの書物が方法こそ違え、ともに深く保守主義に根ざしていたことを指摘するのが有益だらう。『失われた世界』は哲学的保守主義に立脚している。それは新トーマス派の思想家によつて書かれた、といつて

もよいくらいだ。なぜなら本質的にそれは、ジェフアスンからデューイへとつながる自由主義の伝統を、神と歴史のままで謙虚さを欠くものとして非難しているからである。ところが他方『アメリカ人』のほうは、経験論的な保守主義から出ている。それは一切のイデオロギーを、長い間存在している諸制度の重要性という名にかけて排斥する。まへの書物では、われわれには保守主義の哲学が必要だ、ということが暗示されていた。最近の書物では、われわれには何かもつとよいもの、つまり保守的な生活様式がある、ということが語られているのである。

一つの立場から他の立場への移行は、筆者の考えでは、保守主義の思考内での流行の変化を反映していると思われる。一九四〇年代の末から五〇年代のはじめ頃、歴史に関心をもつ多くの知識人が、アメリカ保守主義思想の伝統を定義しようと努めていた。歴史家たちは非常に長い間、自由主義ヒーローの相次ぐ出現をあげめ奉つてきたので、戦後新気分へのこういう最初の反作用は、自由主義者列伝に匹敵する保守主義の権威者たちの殿堂をもたらしこととなつた。ラッセル・カーク (Russell Kirk) やクリントン・ロシター (Clinton Rossiter) や^⑤その他思想家たちの著作は、数多くのアメリカ思想家が原罪を重んじ、公式の進歩崇拜に反対であつたということを示した。ブースティンの『失われた世界』も、こういう

た系列に属するものだ——たとえその貢献の仕方が、自由主義の伝統の失敗をあげただけであつて、ネガティブな段階にとどまつたとしても。

* * * * *

しかしながら間もなく、ヨーロッパ型の保守主義をアメリカの環境の中に打ち建てようとする試みは、消えてなくなつた。今日、われわれはそれを耳にすることがほとんどない。こういう運動はあまりにはつきりとボレミカルな香りをもち、あまりに非現実的な味覚をもつた。いわば、アカデミズムの中での大嵐であつた。ジョージ・フィッツヒュー (George Fitzhugh)、オレステス・ブラウソン (Orestes Brownson) およびアーヴィング・バビット (Irving Babbitt) のような人々には、もつともつと深さをもつていたものだ、或いは仮りに一步譲つても、何かかなりの迫力をもつていたものだ、というように信ずる大信念が必要とされた。実業家や政治家たちの——そして多くの知識人までもそうだが——非常にがちつとした保守主義自体が、啓蒙思想と同じ言葉を用いた(自由とか平等とか——訳者注)。自由主義者も保守主義者も、もはやはつきりと区別し難いように見えた。両者の間のイデオロギー的ギャップは縮まるかのようであつた。そして黙認の気分があらゆる隅々に拡がるにつれて、いまや保守主義思想の伝統を擁護する必要もなくなつた。自由主義

イデオロギーが切つ先をにぶらせたとき、保守主義者もイデオロギーの盾を必要としなくなつたのである。

保守的な歴史学が、外見上そういうものとは考えられないで、流行するようになったのは、まさにこの点においてであつた。それは、右派の役割を弁護することをしないで、左派を右派と合併させる。

それは次のように論ずる。アメリカはこれまで通常、保守的気質を自由主義的な心の状態に融合させてきたのだ、と。こうしてそれは、アメリカ文化の同質性と連続性を見せびらかす。今日の保守主義思想に同調した物の書き方で、エリック・マッキトリック (Eric McKittrick) は最近次のように指摘した^⑥。歴史は諸制度の力を強調

するものである。歴史にはなんらのイデオロギー的粹もない——加えていいうるなら、イデオロギーに反対だという粹以外にはないのだ、と。ブースティンは彼の最近の二つの書物で、この一派に加つた。そして或の意味で、この派をリードしているのである。

なるほどアメリカの歴史家たちにとつて、こういう見解の利点は少なくはなかつた。それは彼らを、いわゆる進歩的な歴史学のあまりにも安易なデュアリズムから縁を切らせた。それは彼らを促して、アメリカ諸制度を理解するうえの、重要かつオリジナルな仕事をさせつつある。彼らはその仕事を続けるべきだろう。しかしながら、保守的な思考の規格 (frame of reference) は、アメリカ史の中に

ある自発性、興奮、蓄および暴力といった諸要素を扱ううえでの、無能力な麻痺状態をつくり出す。現在のこういう気分反抗して成功した数少ない文学批評家の一人、リチャード・チニス (Richard Chase) は、最近、目立つたアメリカの諸小説の特徴となつている野性と突飛さとに人々の注意を促した。これに似たような性質のことが、十八世紀の大覚醒運動から二十世紀の赤い大恐怖 (第一次大戦末のパーマー旋風や第二次大戦後のマッカーシズムなど—訳者注) に至るまで、われわれの社会を震動させてきたのだ——アメリカ社会が強固な制度上の構造をもつているにもかかわらずである。

かてて加えて、今日の保守主義は、思想上の闘争を真剣に考えようとす歴史家の能力をにぶらせる結果をともなつている。歴史家が闘争それ自体を信じないか (アメリカ人はかなり多く、一つの心をもつて今日までできたというのだ)、或いはその闘争を無意味なものにしてしまつて、一定の心理学的調整の中へ入れてしまうからである。このどちらの場合においても、不安を交えた自己満足の霧が、現在、アメリカの過去の上を蔽つているのである。

近い将来、多くの批判的学者たちが、かつて偉大な進歩的歴史家たちを魅了したあの両極性を強調するだろう、などということはないし、また彼らがそうするのは望ましいことでもない。確か

に今日では、ジュファスンとハミルトン、或いは人間の権利と財産権との争いがアメリカ思想史の粹だ、などといひ張る者は誰もない。しかしバリントンやビアードをないがしろにすることは、問題の解決とならない。アメリカ思想は他の弁証法的パターンをもっている。

それを、現在流行の一致感覚の崇拜が隠して出さないのである。なにかんづくこの種の崇拜は、合衆国史のうえて必ずしも些細だといひ切つたり、等閑に附したりすることができないような役割を果した。或る道徳的問題を無力にしてしまふ。それらの道徳的問題がどんなに重大なものであり、かつ緊急を要するものであるかを再発見するためには、歴史家はビアードやバリントンのカテゴリを必要としなしいし、恐らく、彼らのいまはもう価値の下つた実利主義的哲学なしでもやつてゆけるだろう。しかし彼らが抱いたもつと深い価値、つまり闘士的精神の認識、怒りへの感応性、不正を見ぬく感受性なくして進むならば、われわれはみじめな代価を払ふこととなるのである。

① 特に第十三、十四章、アメリカ史学思想に触れた部分参照。
因みに、本書は恩師バリントンに捧げられたものである。

② David Potter (1910-) イェール大学のアメリカ史教授。ジョージア州オーガスタに生れ、イェール大学で修士と博士とを獲得、一九四二年から母校の教壇に立ち、四九年に正教

授。この間四七年には、オックスフォード大学で名誉修士、続いて同大学のホームズウォース教授を兼任した(四七—四八年)。著書に“American Social History”、“History of South”、“Lincoln and His Party in the Secession Crisis” (共著) “Select Problems in American History” (共著) がある。

③ 三部作『USA』の中の言葉。一九三〇年代のドス・パソスはいちじるしくマルキシズムに接近した。合衆国は富める者と貧しい者との、二つの相分れた国民からなる、という意味。

④ Cf. Samuel Hays, The Response to Industrialism, 1885-1914, 1957.

⑤ Louis Hartz (1919-) オハイオ州ヤングスタウンに生れ、一九四〇年ハーヴァード大学卒、四六年学位をとる。その前年から同大学政治学科の教壇に立ち、五六年正教授となる。著書に“Economic Policy and Democratic Thought”がある。

⑥ 本稿「自由の伝統」は学界に異常な反響を呼んだ(Cf. Book Review Digest)。教育家としても知られる。

⑦ Russell Kirk (1918-) ロング・アイランド大学の歴史学および政治学教授。ミシガン州ブリマスに生れ、ミシガン州大学、デューク大学をはじめ多くの大学に学び、一九四一—五三年ミシガン州大学の文明史助教授、五六年からロング・アイランドに移る。著作“History of Conservative Thought”、“Twentieth-Century English and American Literature”、“Modern Political Science”、“The Conservative Mind”、

“A Program for Conservatives”; “Academic Freedom” など広汎にわたる。現在ブースティン、ホフマン (Ross Hoffman) など並んで、「ネオ・コンサーヴァティヴ」の代表的人物とされる (Cf. The Book Review by John W. Lukacs in “The Commonweal” (July 24, 1953))。

Clinton Rossiter (1917-) ヨーネル大学政治学教授。フィラデルフィアに生れ、一九三九年ヨーネル卒業、四一年ブリンストン大学で修士、翌年学位をとる。四六年ミシガン大学講師、翌年ヨーネルに移り、五四年来正教授。著書に：“Seedtime of the Republic”; “Conservatism in America”; “The American Presidency” などがあり、一九五四年にはハンク・ロント賞とワット・ロー・ウィルソン賞とを授賞。

⑧ Eric McKittrick 人名録にも載らないほど、きわめて新進の歴史家。シカゴ大学の教壇に立っている。ブースティンの指導を受けたのもあろうか。著書に、今年発表の “Andrew Johnson and Reconstruction” がある。

⑨ Richard Chase (1914-) 英文学者、コロンビア大学教授。ニュー・ハンプシャー州レックポートに生れ、一九三七年ダートマス大学を卒業、三九年からコロンビア大学英文学講師 (一四五年)、四六年ここで学位をとり、以来今日までその教壇に立つている。“Herman Melville”; “Emily Dickinson”; “Walt Whitman Reconsidered” などの著書がある。

執筆者紹介

熱田 公	京都大学助手
酒井 一	京都大学研修員
森 鹿三	京都大学教授
小野 菊雄	京都大学大学院学生
今津 晃	京都大学助教授
越智 武臣	京都大学助教授
永田 永正	京都大学大学院学生

Main Current of Conservatism in the American Historiography

by
Akira Imazu

In the American historiography was there a period when it had a kind of innovative current in the formation of social history or history of ideas. Generally speaking, the period the War to the War with New Deal in the middle, having three prominent historians, Turner, Beard, and Parrington. After the Secon World War, however, this current completely disappeared, because of the inner requirement to adjust an easy polar grasp by so-called progressive historians, but in a more substantial sense, because of the American capitalistic structure itself, or its international opposition to the communist world.

This article tries to draw an outline of conservative current in the American historiography, through the monograph of John Hyam, a middle standing professor of Michigan State University.